CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

[エッセイ] 私たちのドイツ留学体験記

その他のタイトル	[Essays] Unsere Erlebnisse in Deutschland
著者	中嶋 彩, 西本 望帆
雑誌名	独逸文学
巻	58
ページ	147-151
発行年	2014-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017982

関西大学『独逸文学』第58号 2014年3月

[エッセイ]

私たちのドイツ留学体験記

中嶋　彩：エアランゲン・ニュルンベルク大学

── 3人のドイツ人とタンデム

私は2年生の8月から3月まで、ドイツのエアランゲン・ニュルンベルク大学に留学しました。この留学生活は人生の中で特に充実した日々となったと思います。ドイツの大学に行く前に個人的にホームステイを申込み、ハイデルベルクで1か月間過ごしました。ホストマザーと散歩に出かけたり、料理を一緒に作ったりしながら、目で見て、触れて、ドイツ語を学びました。そこでの経験はこれから半年間のドイツ生活の基礎となりました。1か月後、交換留学先の大学に移り、本格的に語学の勉強が始まりました。日本にいては関わらなかったであろう各国の友人と触れ合うことで、たくさんのことを学ぶことができました。世界の文化事情、政治というような硬いテーマから今の流行、スポーツや料理といった柔らかいテーマまで見聞を広めることができました。しかし留学に行く前の私は、ドイツ語もできないし、英語も特にうまいというわけではなかったので、外国人の方との交流は正直苦手でした。話してもわからなかったらどうしよう、という気持ちが強く怖かったのです。留学に行く前に、すでに留学を体験した人から日本人は臆しやすく他の留学生と接触するのを避けてしまう人も多いと聞き、とても不安になったのを覚えています。確かに、いざ他国の留学生に囲まれると、聞き取れない、話せないストレスが溜まり、辛くなったことがあります。しかし、留学生の交流会に顔を出すことだけはやめないようにしようと通いました。段々と話しかけてくれる友人が増えていき、一対一で私のつたないドイツ語を一生懸命話すと、相手も英語のできない私に合わせてくれ、ゆっくりとしたドイツ語で会話するようになりました。するといつの間

にか辛さも消えていきました。集団の中で話す時も間違ってもいいから話すこと、その大切さを身に染みて感じました。文法がどうであろうがとりあえず話す。それを続けていると、時制や細かい文法にも目がいくようになり間違いも少なくなってきました。

エアランゲン・ニュルンベルク大学には日本学があり、日本語を学んでいるドイツ人と交流することができました。タンデムという一対一でドイツ人とドイツ語と日本語を交互に学ぶ機会があり、私は３人のドイツ人とタンデムを行いました。タンデムでは、授業の予習、教授にきけなかったことや、発音の練習、そして時々雑談をも含め、共に学びました。タンデム中はできるだけ辞書を引かずに、わからない言葉はもっと簡単に砕いて説明してもらい、ノートにもドイツ語で意味を書いていくということを続けることで大分語彙力が増えたと思います。そしてある程度日本語ができるドイツ人には似ている動詞の微妙な使い分けについてシチュエーションを含め教えてもらいました。そして普段の会話の中ではある程度わからなくても流れを切らないように、だいたいの解釈で進めていきますが、タンデムの間は分からないことはすぐに聞き、間違っているときはすぐに指摘してもらうようにしました。正規の授業では、できるだけ積極的に発言することで、指摘してもらえる機会を多くとるように努めました。机上で教科書を使って学ぶだけでなく、ペアワークで互いに協力して短い会話を作り、みんなの前で発表するというように楽しんで学ぶことも多かったです。日本学の授業では日本の歴史の授業を取りました。授業はいつもの留学生向けの授業とは違い、ドイツ人向けなので教授の話を完全に理解することはできませんでしたが、同じように授業を受けている友人に分からないことを聞いて少しでも理解するように努めました。ドイツとは違って長い歴史をもつ日本の歴史は興味深いという話を聞いて、誇らしくなったのを覚えています。そして直にドイツ人の授業に混ざることで感動したことは、講義でも教授が一方的に話すというわけではなく、疑問に思ったらすぐに手を挙げ質問する姿勢です。それも一人ではなく何人も手をあげ、時には教授を押しのけ論争になるほどです。日本の講義ではなかなか見ることができない光景ですが、日本でももっと積極的に授業に参加すべきであると感じました。教授の話を遮るのはよくないと思いますが、質問ができるときに何も言

わない風潮の日本人には見習うべきところだと思います。

この留学を経て、大学生の時期に異国で生活し勉強し見聞を広める機会が持てたことを本当にうれしく思います。この貴重な体験を無駄にしないように、得たものをこれからの生活に生かしていきたいです。留学が不安で悩んでいる人も多いと思います。私もとても不安で仕方ありませんでした。一人暮らしもしたことがないのに、異国でいきていけるのだろうか、と。経験した身からいえば、大丈夫です。エアランゲン大学には留学生担当の先生や日本人の教授がいるので、生活面で困ったことがあれば必ず助けてもらえます。ドイツは本当に素敵な国です。悩んでいるのであればぜひ飛び込んでみてください。時間のある大学生だからこそ、心置きなく留学を楽しめるはずです。

西本望帆：留学体験で積極的行動が可能に

留学前の私は、まだ語学力が未熟であるにもかかわらず、留学することに対してちゃんとした準備もしていなく、不安も感じていませんでした。おそらく、自分の中で、ドイツに行けば毎日ドイツ語を聞き、話さなければならない環境になるため、自然とドイツ語が上達するのだろうという甘い考えが存在していたのだと思います。しかし、ドイツ語の文法をドイツ語で学ぶということは難しく、「形容詞」「冠詞」、「接続詞」といった単語そのものも、日本ではドイツ語を日本語でしか学んでいなかったため、最初は混乱し、自分の語学力の未熟さを痛感しました。

ドイツでは、他の留学生と共にクラス分けされ、ドイツ語を学びました。イタリアやロシア、スペイン、アメリカ、サウジアラビアからの留学生が多かったです。ドイツ語を勉強して、まだ1,2ヶ月だという留学生も、言っている内容がまとまっていなく、文法が全くなっていなくても、積極的に自ら発言し、質問していて驚きました。文法や先生の説明、教科書の内容がわかっていても、発言や質問もせず黙っていれば、理解できていないとみなされてしまうので、悔しい思いもしましたが、何でもいいからどんどん発言していくことが大切なのだと学びました。色んな国からの留学生とともにドイツ語を学びましたが、クラスの中で

英語圏からの人たち、英語が流暢な人たちと、あまり英語が得意でない人たちの２つのグループに分かれてしまうことがありました。やはり英語は、ドイツ語よりも簡単なので意思疎通も楽だということもあるのでしょう。しかし、ドイツ語を学びに来ているのに、授業以外であっても楽な方に流れてしまうというのは、とても違和感があり、不満に思いました。ドイツ語で話しかけるようにすると、英語よりも自分の言いたいことを相手に伝えることは難しいですが、お互いに一生懸命理解しようとするので、さらに友達と仲良くなることができました。

ドイツは、教育や学問も進んでいて、人種差別、偏見などはあまりないものだと思っていましたが、実際はそうではないことがよくわかりました。私のことをアジア人であるという外見から中国人だと判断し、からかって声をかけてくる人も多くいました。本人は気づいてないのだと思いますが、人種差別的な発言をする先生もいました。日本はドイツほど移民も多くなく、人種差別を普段あまり感じていなかったので、先進国であるドイツでもそういった偏見が存在するということにショックを受けました。しかし、自分が日本人であることや自分について考えさせられるいい機会になりました。

学校の授業以外でも、刺激的な毎日でした。机の上での勉強だけでなく、ドイツにいる時にしかできないことをしようと思い、ドイツ国内を旅行しながらドイツ特有の文化、歴史について知ることができました。旅行はほぼ一人旅でしたが、何か緊急事態があっても、近くにいる人たちに聞いて助けてもらうか、自分の力で解決しました。何事にも焦らず、柔軟に冷静に対応できるようになりました。また、旅行先で仲良くなった人と一緒に観光したり、これまでにした旅行の話をしたりしました。その人によって旅行の仕方、楽しみ方、動機もそれぞれ全く違っていて、興味深く思いました。

留学は、帰国後が一番大変になると思います。自分の現状に満足せず、常に目標を持つことが大切です。これまで、海外で働くということは遠い夢のように感じていましたが、留学中の旅行先で知り合った日本人の方から、いろいろと就職に関する話も詳しく聞けたので、将来の夢も広がり、新たな目標を持つことができました。また、ドイツでの旅行で、ドイツへの関心がさらに深まり、卒業論文のための研究意欲もわきまし

た。新しい環境で過ごした留学体験は、私が積極的に自ら行動できるようになった、これからのための大きな一歩だと思います。自分の個性を生かし、自分をうまく表現できるようになったので、今後の将来の夢のための就職活動にも役立てたいと思います。このドイツへの認定留学は、本当に何から何までわからないことだらけで、ほとんど個人留学というような形で、自分で手配や確認が必要でしたが、教授や周りの方々に助けられ、大変お世話になりました。次は、私がこれから留学する人たちの助けになりたいです。